「人間科学研究交流会」報告

人間総合研究センター主催
「人間科学研究交流会―Current Topics in Human Science―」記録

第9回

話題提供者：東　聖子

演　　題：移民研究で学ぶ「越える・跨ぐ・はみ出す」苦しさと楽しさ

開 催 日 時：2015年4月15日，18：00～19：00

開 催 場 所：100号館第1会議室

はじめに

発表者はこれまで、文化人類学や南アジア地域研究、移民研究などの枠組みで研究をおこなってきた。しかしながら、さまざまな地域へ移住した人々、そこでの暮らしについてみていくと、それらの学問的分類を越えうるようなテーマに遭遇する。発表者の研究はまだそのような学際的域に至っていないが、移民研究が人間科学との関連でどのように発展しうるのかを考えるのが本発表の目的である。具体的には、移民研究の学際的な発展可能性について、発表者のこれまでの調査を紹介しながら、境界を越える・跨ぐ・はみ出すという事象に着目して考えてみたい。

南アジアから離れた南アジア世界

発表者の研究フィールドは、「南アジア世界」と言うことが出来る。パキスタン、インド、ネパール、ブータン、バングラデシュ、スリランカ、モルディブといった国々を含む地域を南アジアと呼ぶことが多いが、「南アジア世界」はそれらの地域から物理的に離れた場所にも存在し、日本にいてもその世界は身近なところにある。たとえば、ハラールフードを揃えているエスニック食材店では、パキスタン系の人が店を経営していることが少なくない。このようなお店では南アジア料理に欠かせないさまざまなスパイスや豆類などが店頭にならんでいる。南アジア地域で人気のインド発のボリウッド映画DVDを置いているところもある。商品の多くはパキスタンやインドから輸入されている。このようなお店には国籍を問わず南アジア出身者が集まり、食材やDVDの購入のみならず、かれらの情報交換の場として機能している場合が多く見られる。

次に挙げられるのがインド料理店である。店で提供しているのは、いわゆるインド料理であるが、経営者や店員、コックはインド人とは限らない。国籍の異なる南アジア出身者が、スタッフとして同じ店で働いていることもある。客側も同様に、さまざまな南アジア系の人々が集う。メニューもそのような状況を反映してか、ネパール料理の名前や、パキスタンの地名やインドの地名を冠したものなど、多様な地域性を見ることが出来る。

発表者がおもに参与観察調査をおこなってきた東京のスィク教寺院でも、似たような状況を目にする。定期的におこなわれている礼拝集会には多くのスィク教徒が足を運ぶが、来訪者はスィク教徒に限らない。ヒンドゥー教徒やイスラーム教徒などが参加し、歓談や情報交換をしている姿を見ることがある。神戸のスィク教寺院では、スィク教開祖への信仰をもつスィンディーの人々も訪れる。このような、南アジア出身の移民が移住先でつくりだす空間では、移住先社会において、移民の出身地での文化や慣習がどのように展開するのかを垣間見ることが出来るし、移民の生活をうかがい知ることも出来る。

例えば、レストランのコックには単身で日本に来ている男性が多く、休日は週に1日で店の同僚と休日が重なることはほぼない。食事をとるのも店であり、休日でも食事をしに店の厨房に足を運ぶことはめずらしくない。コック同士のネットワークを通じて、職場の環境や待遇について情報をやり取りし、条件の良いところが見つかれば移っていく。休日でも遠出することはあまりなく、近くの南アジア系食料雑貨店に顔を出し、インド映画のDVDを貸りたり、国際電話カードを購入したりする。DVDの鑑賞と家族との電話が休日におもにやることである。南アジアにおいてインド映画は娯楽のひとつとして親しまれているが、コックの日本での生活においては、唯一の娯楽としていっそう欠かせないものとなっている。離れた家族との紐帯はほぼ毎日欠かさない国際電話で毎日の様子を伝えあうことで保たれている。

一方、建設業関係や中小工場で働く人々は、日曜や祝日が休みであることが多い。休みの日には食材の買い出しやDVDを貸りたり購入したりするために、近くの南アジア系食材店に赴く。そこで出会う人々は、日本での生活や仕事に関する情報を交換し、お互いの連絡先を教えあいネットワークを広げている。そのようにして知り合った友人宅や

同郷者の家に遊びにいき、お互いの家を行き来するようなこともある。家では自分たちに馴染みの食事をつくり、訪れた友人に振舞うのである。

こうした南アジア世界は、日本に限らず南アジア系移民のいる場所であれば、規模の差はあれどこにでもあると考える。発表者が2014年より調査を開始したカナダでも同様に南アジア的空間を見ることが出来る。トロント市街にはリトル・インディアとよばれるストリートがあり、パキスタンやインド、バングラデシュ、アフガニスタンなどからの移民による商店が立ち並んでいる。トロント郊外にも南アジア出身者が多く住んでいる地区があり、そこがカナダであることを疑ってしまうような光景が広がっている。

南アジア世界にある境界

移民によりつくられる南アジア世界について、冒頭で述べたような境界を越える・跨ぐ・はみ出すという視点から考えると、どのようなことがみえてくるだろうか。まず、境界を越える、跨ぐ、はみ出すとは、それぞれどのような状態をさすのか。ある空間に境界が引かれ、その境界を境にAとBに分けられたとき、「境界を越える」とは、AからBへ、もしくはBからAへ移動することを指す。「跨ぐ」とは、AとBの双方に「足」がかかっている状態である。また「はみ出す」とは、Aの境界内にあったものがB側へ、またはBの境界内にあったものがA側へ侵入することを意味する。これらの状況を移民研究という文脈で考えると、少なくとも３つの境界を見出すことが出来る。

最初に、領土にまつわる境界が想起される。具体的には国境や州境である。発表者が調査をおこなってきたスィク教徒移民の出身地であるインド亜大陸北西部のパンジャーブ地域は、イギリス植民地支配からの分離独立により、パキスタン側パンジャーブとインド側パンジャーブに分断された。国境線によりパンジャーブが引き裂かれ、多くの人々が故郷からの移住を余儀なくされた。また1980・1990年代にかけてインド側パンジャーブでは、スィク教徒によるパンジャーブ独立運動の展開にともない、多くの人が犠牲となったと同時に、海外へ移住した人々も少なくなかった。このように、国境線策定をめぐり、おおくの人々が越境し移住することとなった。インド・パキスタン分離独立以後インドでは言語別州編成が進められ、パンジャーブの州境も再編された。しかしながら実際の人々の言語使用状況をみてみると、州境で囲まれたエリア全域が統一的な言語空間となっておらず、言語のみならず民族や宗教が地域内に入り組んで存在している。

次に考えられるのは社会にまつわる境界である。移民コミュニティや関連する組織をみてみると、出身地や現居住地などにもとづくコミュニティのほか、職業、教育、社会福祉といったかれらの活動やそれに対する外部からの支援などを目的とした組織がある。そのようなコミュニティや組織のようすからは、ジェンダーや世代別のつながりが見出せる一方、それとは別に組織やコミュニティのネットワークを介し、さまざまな背景の人々とかかわる場面がみられ、移民コミュニティと移住先社会がともに社会空間を創出している。

さらに、文化にまつわる境界がある。移民の生活スタイル、つまり時間の使い方、習慣、装い、食事、住居、医療などは、移住前と移住後ではかなり異なる。移住先の生活において、自身の宗教や出身地、民族的出自などを意識しながら、あたらしい居住地での人間関係を築くなかで、移住先での生活スタイルとアイデンティティを再構築していく移民の姿がみられる。

このような移民にかかわる境界をみてみると、移民はさまざまな境界を越え、跨ぎ、はみ出して生きている人々、つまり越境的空間を創出しながら生きる人々であることが分かる。国境や州境という領土的境界、コミュニティや組織の枠組みにみる社会的境界、移民の生活慣習やアイデンティティからみえる文化的境界を舞台に、移住先の社会・文化的要素を生活に取り込みながら、独自の越境的空間を創り出すという創造的実践をおこなっているのが移民であると言えよう。

人間科学における境界と移民研究

これまで移民と境界についてみてきたが、人間科学のトピックとしても境界を考えることが出来るのではないだろうか。例えば、生物と環境というテーマを扱う研究からは、人間と自然の境界が浮かび上がるだろう。テクノロジーや情報といった分野では、人間と機械の境界がみえてくる。また、自己と他、健康と病についての研究からは、ひとりの個の人間という境界やひとりの人間のなかにある境界を想起しうる。このような人間科学における境界にまつわる研究と、前節でみた移民研究での境界は、それぞれ個別に独立したテーマとしてとらえるのではなく、関連性をもった共通のテーマとしてみることができることを示唆してみたい。

生物と環境といった人間と自然の境界を考えさせられるテーマは、移民が気候や住居などの生活環境の変化にどのように適応するかという点や、そもそも人間と自然の境界そのものをあり方が、移民の出身社会と移住先社会では異なるという点からも考察しうるテーマである。人間と機会の境界を扱うテクノロジーや情報は、移民の生活をゆたかにするために活用される移民メディアや、コミュニティの形成、移民生活支援とも関連するトピックスである。さらに、人間と人間の境界に関する自己と他や健康と病といっ

たテーマは、移民のアイデンティティや医療およびヘルスケアの問題と密接に関わっている。

　このように移民研究は、人間科学からの境界への視座として他の分野とも関連する越境的テーマを抱えていることが分かる。そう考えると、越境的空間をつくる苦しさと楽しさを、移民同様に移民研究者も経験しているかもしれない。